ISSN 0915－6925

大学アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2001. 3. 22 No.24

Eastern Japan Section, The Japanese Association of College and University Archives

2000年9月20日(水) 全国大学史資料協議会 2000年度全国研究会講演

標本資料の情報整理から展示まで
― 国立民族博物館での経験から ―

平安女学院大学教授　松 澤 員 子

はじめに

国立民族学博物館（以下、民博）は1974年に大阪千里万博公園内に設置された。世界諸民族の資料を展示し、一般に公開するといういわゆる博物館としての機能だけでなく、国立大学共同利用機関として、専任教官を中心として、全国の研究者による世界諸民族の文化や社会についての研究が行われている。私は、創設の翌年から専任教官として、20年間民族学（文化人類学）の研究に従事してきた。また、設置準備室が開設された時から、情報システム委員会の委員の一人として、民博の所有する資料の情報システム構築の仕事に関わっていた。私は資料整理の専門家でも学芸員でもない。しかし、情報工学やコンピュータ民族学を専門領域とする人々との共同作業の経験からお話をさせていただきたいと思う。

Ⅰ　国立民族学博物館の役割

民博は単なる「民族博物館」ではなく、「民族学博物館」なのである。先に述べたように、国立大学共同利用機関として、日本の民族学研究センターの役割を担っているのである。毎年、さまざまなテーマのもとに全国から研究者たちが集まり、共同研究が行われているが、その数は30本を越える。また、総合研究大学院大学の文化科学研究科（博士後期課程）が設置されていて、大学院教育も行われている。さらに、1992年には地域研究企画交流センターも付設された。

さて、博物館として重要なのは、標本資料である。現在、民博が所蔵する標本資料（約23万点、内1万2千点を展示）は開設当時に文部省資料館や他の機関から移管されたものや寄贈を受けたものも少なくないが、研究者たちが自ら現地で収集してきたものである。資料収集は現地調査を伴い、研究活動でもあり、その成果は論文などで発表される。初代館長の梅棹忠夫氏は、民博の展示場は研究者にとってひとつの研究成果の発表場所であり、一つの形態として理解されるべきである、と位置付けられた。民博は資料の収集、調査、研究とその成果の展示、そして公開までを一体的に取り扱うユニークな博物館なのである。

Ⅱ　標本資料の所蔵から情報データの蓄積過程

民博に所蔵される標本資料は高価な美術品ではなく、世界の諸民族が日常的の生活世界で使用されてきたモノである。それは大切な

民族文化研究資料でもある。(収集から所蔵に至る過程はビデオテープで見ていただいたので、その説明は省略したい。)

標本資料の整理にあたっては、最初の受け入れの段階から収納、展示に至るまでの全過程でコンピュータによる情報管理が行われている。情報は「管理情報」と「学術研究情報」という2つのファイルに分けられている。ここでは後者について述べたい。コンピュータに入力された情報は、検索に大きな力を発揮する。その基礎となるのが情報の質であり、検索システムである。その情報を書くのは研究者や管理者である。これこそが時のかかる手作業であり、知識と判断力が要求される大仕事なのである。それでは具体的にどのような情報が付与されるのか、次に、説明をしておきたい。

研究者が現地で標本資料を収集する時、まず記入するのが「収集カード」である。これには標本、すなわちモノの種類(本物、レプリカ、模型など)、資料名(衣服、帽子など)、現地名、収集地、使用地、製作地、使用者、使用年代、用途などが簡単に記入される。このカードの情報がまず入力され、研究者は後に学術研究に有効な情報を追加記入することができるようになっている。

また、モノの形態や構造、大きさや重量を写真(カラーの正面、白黒の平面、側面、鳥瞰図)や実測図(最大級、重量)として自動的に計測し、入力できるコンピュータが導入されている。これを標本画像処理システムと呼んでいる。

松澤員子先生の講演

Ⅲ 情報探索システムの構築

民博が所蔵する資料は世界民族の標本資料だけではない。民族音楽、民族芸能、口承伝承や言語などの音響資料、研究者がフィールドで撮影してきた写真資料がある。その中には戦前に撮影された貴重な資料も含まれる。さらに、図書資料がある。ある民族の祭礼を研究しようとするとき、必要に応じてこれらの資料すべての中から、その民族の資料の所在が検索できることが望ましい。ここでは、それぞれの資料のデータ・ベース作成について説明することはできないが、それらの資料の基本的な検索システムを述べておく。

1)地域・民族コード

図書資料を含め、すべての資料に地域または民族を表示するコードが付与されている。このコードは Outline of World Cultures (Human Relations Area Files, New Haven) を基本に日本については JIS 都道府県コードによって補足したものである。民博ではこれを『地域・民族分類』(略称 OWC) という。A はアジア、AA1 は朝鮮半島(数字1は現代、2以下は歴史時代を表す)、AB1 は日本(10はアイヌ、11以下は JIS 都道府県コードによる都道府県別コード)、AC1 は中国といったように続く。この OWC コードは民博のすべての資料に付与されているので、例えば私が台湾先住民の音響資料が所蔵されているかどうか知りたいとすると、音響資料の AD4 で検索すればよい。図書資料についても AD4 で検索できるのである。

2)用語探索コード

標本資料や映像資料に名称を与えなければならない。しかし、どのように命名するかは研究者の自由である。そこで、例えば、かご、ざる、竹篭と書かれようと、それらは同じカテゴリーに入るものだということを認識するコードが必要になる。民博では、Outline of Cultural materials (Human Relations Area Files, 1982) を基礎に『用語集』を作成し、かご、ざる、竹篭に同じ OCM コードを付与

することで、利用者がそのどの言葉で検索しようと、すべてのものが含まれるように用語集を作成した。

3）写真資料のデジタル化

写真資料にはプリント、スライドなどの静止画像があるが、これらをデジタル化し、OWC、OCMコードの他にも撮影者、撮影年月日、撮影場所、内容など多くの自由書き情報を入力している。

このように地域・民族情報とテーマ情報がコード化されることによって、研究者は質の異なる情報をコンピュータ上で、容易に検索でき、それぞれの収納場所を確認することができるのである。例えば、私が韓国の仮面と豊作儀礼について知りたいと思うと、まず標本資料OWCコードAA1と仮面のOCMコード532.08を検索する。次に、豊作儀礼に使用されるものに限定すると、OCM241.15とを掛け合わせることで、特定の仮面に限定されて画面上でその一つ一つの映像や詳しい情報を見ることができる。さらに、写真資料で実際その仮面をかぶって踊っている写真やスライド、さらに音響資料をも見つけることも可能である。

こうした検索システムが有効に利用されるためには、研究者とアシスタントが協力してどれほど詳細で正確な情報を入力できるかにかかっている。それはまた大変な作業を伴うことも事実である。

まとめ　大学資料の保存とデータベース構築への私見

大学の図書館や資料室を訪ねると、大抵はそこには「生き字引」と呼ばれている人に紹介される。そのような人の頭には所蔵する資料のすべてが頭の中に入っているに違いない。しかし、資料の記憶できる量にはやはり限界があり、さらには重要な問題はその人がやがて退職されていくと、十分には次に引き継がれてゆかないものである。さらに、もっと重大な問題は、写真資料の退化と情報の喪失である。大学の歴史資料としての写真は一刻も早くデジタル化することが望ましいと私は思う。古い写真についての情報は、今聞き取り調査でもして情報を保存すべきである。

また、手書きの書簡や文書など、インクで書かれたものは消えやすい。そうした資料も写真同様にデジタル化することが必要であろう。大学での催しなどのプログラム、また代表者の挨拶などの録音テープなども、判り得る限りの情報をつけて保存しなければならない。

さらに、モノとしての資料も少なくない。それらのモノが整理され、所在がすぐにわかるようになっている大学は多くないと思う。今や、コンピュータの利用は当然のことであり、これなしには毎年増加する資料を整理することは困難であろう。

また、これらの資料はすべてを年代分類することによって資料の有効な利用が可能になるであろう。年代をどのように分類するか、それは、各大学の歴史過程で異なるに違いない。定められた時代コードで、質の異なる情報が検索できることで、その時代の姿が浮かび上がってくると思う。特に、展示に際しては、どんな資料が存在するのか、その全体が例えコンピュータ画面上でも検索できなければ、テーマや構図を考えることは困難である。

大学資料については無知に等しい私ではあるが、資料の保存と情報保存の重要性は民博資料と変わりないと考え、私見を付け加えさせていただいた次第である。

2000年9月21日(木) 全国大学史資料協議会 2000年度全国研究会報告

「大学とアーカイブズ」と「大学のアーカイブズ」
— 利用者の立場から —

関西学院大学経済学部教授 井 上 琢 智

Ⅰ. アーカイブズとの出会い

経済思想史専攻の私にとってアーカイブズとの出会いは、イギリスの科学者・経済学者W.S.ジェヴォンズの文献目録作成の過程で、彼の草稿・書簡類の調査を彼の母校ユニバーシティ・カレッジ（現在のロンドン大学）と最初の就職先オウエンズ・カレッジ（現在のマンチェスター大学）の図書館で行ったことに始まる。さらに、この研究から派生し平行して行った日本人イギリス留学生研究でのアーカイブズとの出会いも、研究におけるその重要性の認識を高めるのに大きな役割をはたした。これらの調査研究は10年を超える歳月を必要とし、その過程で新たなアーカイブスの発見と成果報告とを行ってきた。もう一つのアーカイブズとの出会いは、勤務先の二大学の組合史編纂とこの10年近く携わってきた関西学院百年史編纂への参加においてである。

Ⅱ. 大学とアーカイブズ

日英のアーカイブズの利用を比較して気付いたことは、大学図書館と大学アーカイブスと地元の公共図書館との有機的関係の有無である。例えば、イギリスの大学図書館は当然のことながら公刊された出版物のより完全な収蔵を、そして大学アーカイブズは学籍簿、カリキュラム、試験問題、授業料、卒業・学位取得名簿、さらには、当該大学の卒業生や教員の種々のアーカイブスを整理・収蔵しており、完全ではないにせよ関連情報の提供が可能なように互いに連携している。さらに、19世紀に発達したイギリスの公共図書館は、図書だけでなく、地元の著名人の個人情報を丹念に収集・整理している。具体的には、死亡記事や埋葬記事など地方紙等からの情報の収集に努めている。公共図書館は、大学図書館・大学アーカイブズ以上に、時間的にも史料的にもより優れた点を多く持っている。

このようなイギリスの状況に比して、日本の大学図書館、大学アーカイブズ、公立図書館は、そのあらゆる点で未だ不十分である。とりわけ、アーカイブズの収蔵については、大学アーカイブズを恒常的に併置している大学はきわめて少なく、また、大学図書館では、その収集が目的になっていない図書館が大半なため、アーカイブズの収集はきわめて貧弱である。従って、当該大学の旧教職員・卒業生などの情報の収集はきわめて不十分となり、保存すべき学籍簿などの基礎資料すら利用を念頭に置いた保存とは言い難いのが、大方の現状であろう。また、公共図書館も、確かに例外があるものの、ほとんど研究用とはいえず、市民の教養・娯楽のためのものに過ぎないことは、大きな問題であろう。

Ⅲ. 大学のアーカイブズ

それでは、大学図書館にせよ、大学アーカイブズにせよ、大学が所蔵すべきアーカイブズとはどのようなものであろうか。安藤正人(『記録史科学と現代』)のアーカイブズ・サイエンス論によれば、この学問には、記録史料認識論と記録史料管理論があり、前者は近年進歩してきたにもかかわらず、後者は未だ不十分だと指摘する。

前者は ①大学運営の歴史を示す公的文書、②大学諸機関の議事録・意見書・答申・報告書、③大学発行の年報・要覧・雑誌・新聞・広報、④卒業証書・アルバム・講義ノート・伝記・書簡、⑤理事長・学長・教授・職員の私蔵する文書類の内公的資料のみ、⑥大学設立者、寄付者、卒

業生などの関係書類、⑦大学の歴史を示す記章・記念品・旗・制服・制帽等、⑧大学に関する写真・テープ・フィルム等、⑨大学史に関する書刊行物、⑩学問的な意味をもつ実験器具・研究室製作作品・報告書等（寺崎昌男・別府昭郎・中野実編『大学史をつくる』）である。

さらに後者については大学図書館・博物館・大学アーカイブズの不十分さに加えて、各機関で勤務する図書館司書、学芸員、アーキビストの不十分な育成・配置など、その問題の解決は大学経営・運営にも関わる問題であるがゆえに、きわめてその解決は困難である。

大学博物館構想中の関西学院大学図書館および関西学院学院史編纂室を例にとってこれらの問題に具体的に言及しよう。

記録史料認識論に関していえば、上記史料の内、①から③、⑦から⑨までの史料はほぼ学院史編纂室の所蔵目的とされているが、④から⑥については、多少収集されてはいるものの未だ不十分である。とりわけ、すでに廃校となった学校についての史料は、編纂室に所蔵されているものの、現存の大学学部および高中学部の学籍簿、卒業証書などは当該組織に所蔵され、統一的所蔵が出来ておらず、利用者にはきわめて不便である。さらに、講義ノート、卒業論文等を含む教職員・卒業生の私的文書等については、例外はあるものの、ほとんど収集されていない。さらに、⑩、とりわけ機器類については、まったく収集ができておらず、ほとんどが廃棄されているのが現状である。その点、早急に大学博物館構想の実現が望まれる。

さらに、教職員の出版物については、「新月文庫」という名称での収集が不十分ながら行われているものの、その帰属が大学図書館にあるのか、編纂室にあるのか、最終的な結論は出ていない。この帰属問題は、寄託・寄贈された旧教員の諸史料についても起こっており、その解決が待たれる。さらにアーキビストが不在なために、寄託・寄贈された史料は、未だダンボールに入れられ、整理を待っている状態である。

記録史料認識論について、以上のような問題点があるものの、関西学院の場合、近年の大事件である大学紛争および阪神・淡路大震災関連の史料については、一部未整理なものがあるものの、当初からそのことの重要さを認識し、その収集と整理に心がけたため、相当整ったものであると言えよう。

記録史料管理論については、関西の大学図書館にその傾向が強く見られるように、アーキビスト・学芸員の専任職員としての採用は、皆無に近く、図書館司書についても、その採用があるものの、専門職としての位置づけが希薄であり、近年一部の職員にその位置づけがなされているものの、一般的には通常の配転の適用者になっている。その点では、記録史料管理論が提起する問題の解決はきわめて困難だといえる。

Ⅳ．大学アーカイブズの諸問題

以上のように、関西学院を例にとりながら、大学アーカイブズに関わる問題を考えてきたが、さらにいくつかの問題点を列挙しよう。①常設の大学アーカイブズの設置問題、②現在の大学はさまざまな意味で「地域に開られた大学」であることが求められているが、それと同様、「地域に根ざしたアーカイブズ」の設置・移行が求められている。それを通じて、大学アーカイブズは、現在なお不十分な公共図書館や企業史料編纂室の代替的役割を果たすことが出来よう。③大学アーカイブズと大学図書館、大学博物館との合理的役割分担と有機的関係の構築する必要があるが、その際に史料利用者の視点を導入する必要がある。④酸性紙問題を含む記録史料の管理をＩＴ機器等の導入によって解決する必要がある、⑤ＩＴ革命に対応するアーカイブズ関連情報の発信のためのシステムの開発が必要である、⑥一次史料の翻刻は利用者にとって重要な問題であるが、その翻刻にかかる経費・担当者が不足しているため、利用者にとってきわめて不便である、⑦従来型の「集まる」大学アーカイブズから「集める」大学アーカイブズへの転身問題。これらの問題は、その一つ一つが、その問題解決が困難なものであるが、このような問題の解決に向けて、関係者の今後の努力が期待される。

2000年9月21日(木) 全国大学史資料協議会 2000年度全国研究会報告

デジタル画像を用いた美術作品研究装置の開発

関西学院大学総合教育研究室 深 井 純

はじめに

今日のデジタル技術の発展に伴い、文化財を所蔵する多くの美術館や博物館でも、デジタルアーカイブを構築する動きがみられる。ここでは広がりを持った利用形態が意図されており、インターネット上での画像公開は、地球規模でのコンテンツの社会公開ともいえよう。と同時に、実物に限りなく類似した画像は、概念を中心とする接し方では抜け落ちてしまう数多くの見方、そして感性に訴えるものを復権させる可能性がある。

このようにメディア開発に伴い、新たな現実が強いインパクトをもって創出されつつあるが、今日のメディア利用には問題点もある。高額の開発費、技術発展に振り回される危険性、そして急速な陳腐化現象も危惧される。このため、開発目的や方向性を確立することが、特に求められることになる。

研究装置開発までの経緯

1．レーザーディスクによるマルチメディア型ＣＡＩ（1990～1994）

関西学院大学総合教育研究室で行った標記の開発が、本研究の先駆となった。この研究ではまず、白鶴美術館が所蔵する唐時代の銀器を主題とするビデオ作品を作製した。作品の前半部は動画とナレーションから成るが、最終部には銀器の静止画を収録した。これは器物の底裏や内部など、様々な方向からの映像と部分拡大像である。その後も同様の作品製作を行い、「駒競行幸絵巻」（和泉市久保惣記念美術館1994）など、四作品を制作した。

次にこれらのビデオ作品を用いて、ＣＡＩの開発を試みた。われわれが目指したのは、ハイパーテキスト型ＣＡＩであった。これは、まとまった内容を持つ固まりの中を自由に行き来するという構造で、インターネットの世界に類似している。サンプルにしたのが「伊勢物語絵巻」（1993）で、教材作成という見地から、この絵巻が持つ多様な要素を整理し、5層から成る構造を持たせた。その結果、65にものぼる要素となり、しかも要素間のリンクの枠組みの問題もあり、殆ど不可能に近い開発計画であることがわかった。

2．ＭＨＴ試作品の開発（1993・1994年）

このような中で、研究の方向性を再考することとした。その立脚点は、美術作品教育ということではなく、＜一人の人間がどのようにして美術作品と向かい合うか＞ということである。個人個人は、様々な行動や思索を行うが、それらに応えることのできる装置の提供をめざす。ここから研究の新しい方向性を探った。ハードウェアシステムの構成はＣＡＩと類似しているが、開発の意図や方法は全く異なる。このためＣＡＩとの混同を避けるため、この装置を「メディアハンドリングツール（Media Handling Tool：「ＭＨＴ」）」と名付けた。

ここでは利用者が課題を発見し、その課題を検証することのできるツールの提供を目指している。つまり、研究環境の提供が基本であり、その環境上で得られた研究成果の蓄積と活用にその目的がある。そしてこの装置の開発にあたっては、研究面での実用性を図るため、質的に優れた美術作品の画像を多数収集し、社会的な広がりを持った活用を目指すことにした。

開発にあたっては先のビデオ作品を用い、関連会社の協力を得て、ワークステーション

上で制御機能の開発を行った。実現したのは、収録作品を器形・時代順に提示する「一覧」、部分拡大・多方向像を提示する「詳細な検討」、メモ等を記述する「文字入力」などの諸機能であるが、問題点もあきらかになった。それは、高額の開発費、実用性などの点であり、なかでもテレビ放送規格による画質の問題が大きな障害となった。

報告する深井　純氏

MHT本作品の開発（1995～）

(1) 目的の明確化

画像の種類や大きさ、またコンピュータ制御の方法は、利用目的から決定される。このMHTでは、人が実際に物を見るときの見方そのものを実現しようとしている。ここでは物を順序立てて見ることもできるし、突然思いついたものも自由に見ることができる。その際、高精細画像により、実物を目の前にした時以上の拡大ができる。そして、その過程で生まれた新たな発見や疑問が、その場で検証することが可能であり、見解を蓄積することもできる。ここでは、文献を中心とする研究方法に起こりがちな、カテゴリー化された記憶の目を通じた物の見方を払拭し、画像（物）そのものと対峙する環境提供を行う。その際、唯一の基準、確かなものとなるのが収録された画像であり、ここから製作時代の決定や真贋の問題へと発展していく。

とはいっても、全く無規定なかたちでの提示は混乱をもたらす。このため最低限の類別化を、仮の形で行うこととした。それは素材（絵画・書・工芸等）・地域（国別）・時代であり、研究の進行につれて改変が可能な形にしておくこととした。

開発に当たってはまず、作品を見る（研究）時の基本過程を次のように設定した。

【全体の観察 ⇔ 部分観察 ⇔ 類似作品との比較】

通常はまず、作品全体を見る。そして作品に近づき、部分をより詳細に観察する。この時点で、知っている作品を思い浮かべて、類似点や相違点について考える。そして、それをより確かにするため、また新しい発見を求めて検討を加えるという過程である。

なお主題として、手始めに中国古鏡を取り上げることとした。

(2) 映像の役割とその製作

コンピュータ画像の利用は、人間の記憶力を補ったり、ガラスごしよりもよく見えるといった消極的意義だけにとどまらない。映像は現実の対象を抽象化したものであるが、このことが積極的な意義をもたらす。見たい事柄への意識の集中を容易にしたり、ルーペ的な拡大で全体を見わたすことができる。さらに、一つの視野内で複数物を比較したり、重ね合わせることも可能である。これらは、実物を見るときとは異なった、新たな観察方法であるともいえよう。

映像製作にあたっては研究面での実用性を考慮し、大判フィルム（四×五インチ）による静止画を基本とした。撮影は、そこに実物があるかのような存在感と、その作品の価値や質感などを表すことに努めた。そして写真の種類は、その作品の特徴を最もよく表す代表像をはじめとし、部分拡大像、鏡面像、側面像、覗き込み像とした。これにより、錆の状態や金属色（組成）、鏡の反りや側面の角度・厚さを見ることができる。

写真のデジタル化に際しては、実物を8倍大ルーペで観察する時よりも拡大できる画像を基準とした。ここでは青銅鏡の泡・錆・結晶・コーティング等の詳細が描写される。採用した規格はプロフォトCD64ベースで、一画像が4,096×6,144ピクセルである。

なおここで、画像データベースの事に触れておきたい。その構築には多大な労力が必要であり、活用よりも作成作業そのものが自己目的化しがちである。またその際に、言葉による枠組みに縛られ、重要な曖昧さが失われ

たり、歪みが生じることもある。このMHTでも画像データベースは不可欠ではあるが、その構築が目的ではない。

(3) コンピュータの役割と制御方法

この装置で研究活動を行うためには、映像だけではなく、文献を提示したり、考察した事を文字入力できなければならない。また文様の配列や寸法など、データの取扱いも望まれる。様々なデータが蓄積されていくと、後に続く人は、既にあるデータを活用して、さらに先に進むといった研究状況が生まれてくる。このことは、履歴機能にも通じる事柄である。先人の研究論文の背景には、膨大な量の作品や文献が隠されているが、これらを共有することはできない。しかし、研究活動がこのツール上で可能であり、さらにその過程が記録されていれば、利用者はこの装置に向かうことで、先人の辿った軌跡を追体験できる。このことは、利用者に本質的な研究活動をもたらすことにもなる。このような意味で、研究者にとって必要な研究環境をこの装置の中でどこまで実現できるかが、この研究の成否の鍵を握っているといえよう。

制御ソフトの開発で最も留意した点は、個別化と総合化をシステム内で実現することであった。個別化とは、研究活動が決められたコースを歩むのではなく、個々の研究方法に応じて、柔軟に対応できるということである。一方の総合化とは、様々な利用者の研究方法や成果を、適切にフィードバックさせ、共有できる仕組みを持たせることである。成果の活用は、研究活動の効率化という点でも有効である。

この構想を実現させるため、独自の制御ソフトを開発中である。そしてその骨格は、次の三つのウインドウから成っている。

1．画像一覧

作品のサムネイル画像の提示を行う。一覧像の提示順序の変更、個別作品の並べ替えが可能であり、サムネイル画像をクリックすると拡大像が提示される。

2．データボックス

研究成果をテーマ別に、総合化して一覧表示する。また「ノート」の存在も表示する。

3．ノート

個別見解やメモを記録するウインドウで、画像を加工して添付したり、文字入力できる。

基本的な開発が実現すると、本装置を用いて研究が行われるが、「画像の追加」「制御ソフトの検証と改善」「成果の蓄積と履歴保存」という活動が、サイクルとなって連続的に繰り返えされ、より充実したツールを目指すことになる。

現在の開発状況

映像は国宝4点、重要文化財35点を含め、1,611点3,664カットになっている。またコンピュータソフトは、三つのウインドウの基本設計ができており、「画像一覧」と「データボックス」の一部が実現している。

一方、1998年度には自治省「次世代ハイビジョン・ミュージアムシステムの開発に関する調査研究」実証実験に参加し、和泉市久保惣記念美術館が共同研究の成果の一部を公開している。

（：http：//www.digital-museum.gr.jp/）

映像の種類と数量（2000年9月現在）

所蔵者	古鏡		青銅器		その他工芸		書画	
	代表像	部分像等	代表像	部分像等	代表像	部分像等	代表・部分像	(作品数)
白鶴美術館	49	109	18	133	13	8	331	(5)
和泉市久保惣記念美術館	256	207	35	201	53		1,184	(540)
黒川古文化研究所	113	158						
建仁寺（正伝永源院）					121		176	(173)
その他	231	205			3	13	47	(1)
計	649	679	53	334	190	21	1,738	(719)

全国大学史資料協議会2000年度総会ならびに全国研究会参加報告

中央大学大学史編纂課　松　崎　　彰

昨年９月20日から22日にかけて、全国大学史資料協議会2000年度総会および全国研究会が開催された。開催に先立ち、同20日13時より神戸女学院文学部棟Ｌ-28教室において2000年度全国役員会（第31回東日本部会幹事会）が開かれ、「協議会規約」第６条第３項に基づいて正副会長校の交代が実施された。新会長校には東海大学、新副会長校には桃山学院が就任し、総会の承認を受けた後に、役員校の互選により神奈川大学を事務局校に選出することが決定された。つづいて、東西両部会合同事業計画についても審議され、2001年度総会・全国研究会の活動内容を叢書第３集としてまとめる方針を立て、来年度はその準備作業を進めること決定し、総会に報告することとした。また、創価大学の協議会入会（東日本部会）を９月６日付で承認した後、総会・全国研究部会の事務分担が決定された。

全国役員会終了後、同日14時30分から2000年度総会が開催された。はじめに、司会の熊　博毅氏（関西大学）が開会を宣言し、会場校を代表して城﨑　進氏（神戸女学院理事長・院長）が歓迎の挨拶を行った後、総会正副議長の選出を行い、後藤正明氏（福岡大学）を議長に、桑尾光太郎氏（学習院大学）を副議長に選出して審議に移った。

まず、全国役員会の審議結果が報告され、正副会長校交代（本年４月１日付）の件が承認されるとともに、2001年度総会・全国研究会の記録を叢書第３集として刊行するための準備作業を東西共同事業とする提案も全会一致で承認された。これを受けて新たに会長校となった東海大学瀬水澄夫氏から就任の挨拶があり、事務局校として神奈川大学が選出されたとの報告があった。続いて、東西両部会の本年度事業計画が西日本部会事務局校（関西大学福井智佳子氏）・東日本部会事務局校補佐（中央大学松崎彰）から報告されて総会の了承を受けた後、桃山学院西口忠氏から、今大会の開催にあたって、神戸女学院創立125周年記念事業のご協力と関西学院創立111周年記念事業からの助成金につき、紹介と謝辞が述べられた。

総会終了後、15時10分から松澤員子氏（平安女学院大学教授・前神戸女学院大学長）を講師として記念講演会を開催した。はじめに、神戸女学院史料室長上野輝将氏から講師プロフィールの紹介があった後、「標本資料の情報整理から展示まで—国立民族学博物館での経験から—」の演題で、講演が開始された。国立民族学博物館の設立準備段階から検索システムの構築に携っていた松澤氏の講演は、同館における資料の保存・整理過程を詳細に紹介し、データベース構築の意味と必要性を強調等した報告であった。

講演会終了後、神戸女学院図書館の「オルチン・コレクションの展示」を見学し、18時30分よりホテルサンルートソプラ神戸２階ホールにおいて、懇親交流会を開催した。若山晴子氏（神戸女学院）の会場校挨拶に続き、伊藤昇氏（立命館）の開会の辞、乾杯の発声によって進められた懇親会では、各会員間の情報交換が活発に行われ、終始、和やかな雰囲気の中で親睦を深めた。また、東京経済大学、関西学院から近況報告があった。会には講演者の松澤員子氏の参加もあった。司会進行は松崎彰（中央大学）、閉会の辞は東田全義氏（慶応義塾）であった。

翌９月21日10時より、関西学院（Ｅ号館）において2000年度全国研究会（第22回東日本部会研究部会）を開催した。はじめに、会場校から山内一郎氏（関西学院院長）と山本栄一氏（関西学院学院史編纂室長）の挨拶があり、引き続いて井上琢智氏（関西学院学院史編纂委員、経済学部教授）と深井純氏（関西学院総合教育研究室）両氏による研究報告が

あった。井上報告『「大学のアーカイヴズ」と「大学とアーカイヴズ」－利用者の立場から―』は、「アーカイヴズ」という言葉を、資料保存場所を指す場合と資料そのものを意味する場合の両側面からとらえ、大学史資料保存の意義を利用者の立場から考えようとしたもので、大学内の機構と相互協力の関係を築きつつ地域に根ざした大学アーカイヴズとして機能すべきとの提言で報告を結ばれた。また、深井報告「デジタル画像を用いた美術作品研究装置の開発」は、文化財のデジタル情報化にもとづく資料整理・保存・活用方法を論じたもので、分析に利用する具体的な研究機器の説明や分析者自身の問題意識など、多様な問題点を提起した報告であった。

研究報告終了後、関西学院時計台（学院史編纂室）２階ホールにて展示会を開催した。今回の展示会は、年史編纂や資料保存に関連する諸企業の先端技術を実際に見学・体験する目的で企画された会であり、会場には株式会社堀内カラー・凸版印刷株式会社・株式会社廣済堂・資料保存協議会・大日本印刷株式会社の各社が機器を設置し、実際に稼働させながらプレゼンテーションをおこなった（資料参加＝株式会社ニチマイ）。展示内容は、資料保存のデジタル化と情報のデータベース化技術が中心であったが、他方で資料現物の保存・修復技術もとりあげられていた。展示会の趣旨に賛同くださり、ご協力くださった各社に改めて御礼申し上げます。

また、同日にはフリートークも予定されていたが、時間の都合で以下に掲載する質問や意見等の紹介に変更された。

＊デジタル化予算の具体的な内容を教えて下さい（中央大学）
＊資料を分類する上で、文書関係は文書類として整理していたのですが、大量になってきたので、検索するのに時間がかかったり、わかりにくくなったりしています。文書類の中での細分類をしたいのですが、どのようにすれば、分かりやすいでしょうか。また、分類した場合の記号のつけ方などを教えていただきたい。（大阪商業大学）
＊データベース化ソフト（アクセス、エクセル、ファイルメーカー、テキストファイル等）は、何が最適でしょうか。（東北学院大学）
＊データベース化する場合のファイル容量はどの程度にすべきか。（宮城学院）
＊デジタル化する場合の1データ当たりの見積単位はどのくらいと見当すればよいか。（宮城学院）
＊デジタルデータの蓄積と活用のシステム（特にリード面）は。（宮城学院）
＊ＯＣＲを前提とした資料の画像データを作成する場合、画素数をどの程度に設定するのが最適なのでしょうか。読み取り精度とデータサイズの折り合いが知りたい。（広島大学）
＊映像資料・音声資料のデジタル化について、系統立てて推進されている例を教えて下さい（予算、完成目途、機材等）。（大阪音楽大学）
＊デジタルカメラ等で撮影した写真の保存方法について、教えて下さい。（大阪商業大学）
＊オーラルヒストリーはどのように記録されていますか。どのような位置づけでまとめられていますか。（大阪音楽大学）
＊デジタル資料の保全について、点検とバックアップシステムについて、系統立てて実施されている例を教えて下さい。（大阪音楽大学）
＊メンテナンスはどうしていますか。次々と新機種のコンピュータが出てくる現在、更新の時期、方法等はどうされていますか。（東北学院大学）
＊マニュアル化している大学の実状を知りたい（東北学院大学）
＊デジタル化された資料は、具体的にどのように活用しているのか。また、利用者はどのような人たちで、どのような目的で活用しているのか。（愛媛大学）
＊歴史資料としての活用のほかに、大学業務の中で活用されることはあるのか。具体的には、どのような資料が必要とされているのか。（愛媛大学）
＊原資料の活用と比較して、利便性や利用頻度などはどうか。（愛媛大学）
＊当該部署でデータベースを作り上げるこ

とは困難です。それは、財政面でも大きな比重になりますので、今回は大学図書館のＬＡＮの一部を資料室用として使用することにしました。しかし、それは立ち上げあるまでに様々な問題解決が必要です。まず、対応できる、図書、定期刊行物あたりから取り組み、その様子を見ながら資料・史料・標本の順に入力したいと思っていますが、現在、ＬＡＮの線は部署まで来ています。これから、具体的にどうするのか、「図書館ネットワーク委員会」が作られ、話し合いがもたれています。データベースの取り組みも、全学園的な動きとなれば大変です。よい例があればご教示ください。（梅花学園）

＊デジタル化の媒体の保存、変換等において、不利益な点、不都合な点についての情報が少ないように思う。情報があればご教示いただきたい（個人会員・日露野好章氏）

最終日の９月22日は、甲南大学図書館ＡＶホールにおいて阪神・淡路大震災関連の研究会を開催した。講師は土山敏夫氏（甲南大学広報室次長）にお願いし、「甲南大学の阪神大震災―教務部の対応を中心に―」の演題でご報告いただいた。報告は、阪神大震災当時、教務部に所属されていた土山氏の体験と教務部の対応を、レジュメ・記録ビデオ等を利用して具体的に総括・紹介する内容で、想像を絶する事態の展開に改めて驚かされてしまった。また、土山氏は震災から学ぶこととして、第１に、人員確保の問題で不測の事態が生じたとき、徒歩で大学に来ることができる教職員がどれだけいるかによって対応が大きく異なる点、第２に重要情報の危機管理として二元的管理を徹底すべき点、第３に決定権者が分散されたときのデメリット、第４に罹災時の権限集中化が可能となるような危機管理体制を徹底することの重要性、第５に全学協力体制と人的ネットワークの必要性、という５つのポイントを指摘し、いちばん大切なの点は人との関係に尽きると強調して報告を結んだ。

報告終了後、同大学学園史資料展示室・阪神大震災記念石碑・学内キャンパス等を見学し、引き続き白鶴美術館・白鶴酒造資料館に移動、両館を見学して全日程を終了した。

最後に、総会・研究部会の会場を提供してくださった会場校をはじめとして、全体の企画を担当した西日本部会、展示会のプレゼンテーションを快諾してくださった各社のご協力とご尽力に、心から感謝いたします。

出席校

（西日本部会）

大阪音楽大学、大阪国際学園、大阪商業大学、大谷大学、追手門学院大学、関西大学、関西学院、京都産業大学、甲南大学、神戸女学院、西南学院大学、天理大学、同志社大学、同志社女子大学、梅花女子大学、広島大学、福岡大学、桃山学院、立命館、龍谷大学、　遠藤トモ（顧問）、折田悦郎（九州大学史史料室）、川崎啓一（関西学院広報室）、河野仁昭（顧問）、高瀬志保（愛媛大学50年史編集室）、冨岡　勝（京都大学百年史編集史料室）、中西清和、原登久雄

（東日本部会）

学習院大学、神奈川大学、國學院大學、慶応義塾、恵泉女学園大学、国際基督教大学、上智大学、成蹊学園、専修大学、創価大学、拓殖大学、玉川大学、千葉商科大学、中央大学、東海大学、東京経済大学、東北学院大学、東洋大学、法政大学、宮城学院、武蔵野美術大学、明治大学、立教大学、早稲田大学、神谷　智（名古屋大学史資料室）、中野　実（東京大学史史料室）、西山　伸（京都大学百年史編集史料室）、篠崎高子（青山学院資料センター）、山口拓史（名古屋大学史資料室）

（オブザーバー）

聖和大学歴史資料室・井口純子、
神戸大学百年史編集室・河島　真

合　計

西日本部会　＝20大学39名、８個人会員
東日本部会　＝24大学31名、５個人会員
オブザーバー＝２名
総　計　＝44大学70名、13個人会員
オブザーバー＝２名　（総数85名）

2000年11月16日(木) 研究部会

沿革史編纂の事例研究
― 立教学院125年史の編纂をめぐって

立教学院史編纂室　永井　均

はじめに

立教の起源は、米聖公会の一宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズが1874年2月に築地に開いた私塾に求められる。そこでは英語と聖書が教授された。1999年に立教は創立125周年を迎え、5月8日には盛大な祝賀会を開いてこれを祝した。すでに1989年から125年史の編纂が本格始動しており、2000年3月までに資料集5巻、図録1巻の全6巻が刊行された。小論は、この巨大な編纂プロジェクトそれ自体を歴史と捉え、刊行にいたる道程を概観するものである。かかる作業は校史編纂のケース・スタディとして、何らかの教訓を我々に示唆することであろう。

一　編纂・刊行決定への道

1　編纂の背景

125年史の編纂計画が学院理事会で本格的に審議されたのは、1989年1月13日の会議においてであった。その席上、八代崇院長が「学院125年史に関する件」を提案したのである。すでに1986年頃より学院・大学内部で編纂への模索が細々ながら続けられてきたが、いまようやく具体化への兆しが見えてきたわけである。1月13日の理事会で協議の結果、資料収集はこれを行うこと、具体的事項については今後、学院常務会で審議していくことが決まった。常務会とは、立教学院の運営に関して協議、決定する学院理事長の諮問機関であり、理事長以下、院長、大学総長、総務理事、財務理事など10名前後で構成される。

八代院長は計画をより具体化させるため、1989年3月に学院と各校の識者8名からなる「立教学院125年史編集に関する懇談会」を招集、編纂手順や体制等について協議を開始した。立教学院傘下の諸学校の教育・研究統轄者である院長が、年史編纂に関心を寄せ、企画のイニシアティヴをとったことで、プロジェクトは実現に向けてより鮮明な道筋を与えられたといえる。懇談会では、年史の規模についても話題にのぼり、通史とウィリアムズ主教書簡集の2本柱で構成する方向で話が進んだ。八代院長は懇談会の議論を踏まえ、同年7月の常務会に「立教学院125年史編纂体制（案）に関する件」を提案、組織にかかわる構想を提言する。編纂方針や構成については今後の課題とされた。

2「編纂に関する基本計画」承認までの曲折

八代院長の提案を受けた学院理事会は、1989年12月8日の会議で「立教学院125年史編纂準備委員会」の設置を決定した。各校の教職員14名で構成される同委員会は、委員長に着任した八代院長を支えながら編纂の基本方針、構成、予算などの審議に当たった。翌1990年3月には、90年度の作業課題と予算案を編纂準備委員会に答申する任を負う「立教学院125年史編纂準備委員会小委員会」が始動する。小委員会は、編纂の基本方針、構成、体裁の素案を準備し、さらに委員会内に「通史グループ」や「ジャパン・レコーズ・グループ」、「ヒアリング・グループ」を設けて資料調査を推進するなど編纂の実働部隊として機能した。編纂プロジェクトが始まったとき、学院には関係資料が系統的に残されておらず、また震災や戦争の混乱のなかで失われし草創・旧制時代の資料も少なくなかった。許認可関係文書も含め資料の渉猟・確保は当初から最重要課題となっていたのである。

1992年5月、通史の目次案を編纂準備委員会に献策する目的で同委員会内に「立教学院125年史目次等作成専門委員会」が設置された。委員長には図書館長の鵜川馨経済学部教授が就任した。編纂準備委員会は専門委員会

からの建議を踏まえて、1993年1月12日に「立教学院125年史編纂に関する基本計画」を策定する。ここに初めて刊行計画の全体像が示されたわけだが、それは1994～2002年度の9ヵ年で通史5巻と資料集2巻に加え、図録、ウィリアムズ主教書簡集2巻の総計10巻（4600頁）を刊行するという壮大なものだった。

本計画案はしかし、学院常務会の強硬な反対論に曝されてしまう。すなわち、同月末から翌月初めにかけて開かれた常務会は膨大な刊行計画と予算に疑義を呈し、八代院長に再考を求めたのである。今回の編纂は既刊の『立教学院百年史』に25年分を加えればよいとの反対意見に象徴されるように、編纂者と理事との間における認識の齟齬が露呈した瞬間であった。

専門委員会は、3月2日の会合で「基本計画」を再検討、結果、原案を大幅に縮小して、通史1巻、史料編2巻、書簡集2巻、図録1巻の全6巻（3100頁）とし、刊行は1995年度から開始、99年度までにすべての刊行を終えることを決定する。修正案は3月19日の常務会で承認された。刊行終了までに残された歳月はわずか7年であった。

二　編纂の経過をめぐって

1　編纂の基本方針

八代院長をはじめ各委員は、『立教学院百年史』にその後の25年分を加えるのではなく、新たな観点、資料から125年の歳月を再検証することを企図し、より具体的な編纂方針を次の如く定めた（「編纂に関する基本計画」）。

> 「近代日本史の流れの中で、教育･研究機関としての立教学院はどのような人間を形成し、どのような社会的文化的役割を果してきたかを跡づける。そのため、キリスト教に基づく建学の精神を明かにするとともに聖公会との関係、近代日本のキリスト教界との関係、近代日本の教育体制における立教学院の位置とその変化などを念頭に置いて、総合的学園としての形成の歩みを明かにする。さらに125年の歴史を踏まえ、21世紀にむけての学院の将来展望に資する。」

かかる理念のもと、「リーダブルな編集（readability）」が追求され、トピックごとの編集、章・節解題の配置など『資料編』の構成に色濃く反映された。さらに、実際の編纂途上で各委員、編纂室の脳裏を支配したのは、第一次資料の重視と典拠を明記するという歴史研究の基本姿勢だった。

2　編纂態勢の形成と展開

1995年4月、『資料編第1巻』の刊行を目前に控え組織の再編がなされ、「立教学院125年史刊行委員会」と「立教学院125年史編纂委員会」という2つの委員会が新たに設置された（従来の各種委員会は解散）。前者は、予決算、内容等を最終的に承認・決定するなど125年史刊行に関する最高責任機関であり、学院常務会がその任に当たった。後者は、125年史各巻の編纂を担当する全学委員会である。メンバーは旧・専門委員会を中心に選任された（発足時は26名）。1995年4月11日の初会合で鵜川教授が委員長に選出された。

編纂の諸実務をとる部署としてすでに1993年4月1日に「立教学院史編纂室」が設置されていた。発足時のメンバーは学院嘱託1名と学生アルバイト6名（うち大学院3名）の計7名だったが、徐々に増員が図られた。なかでも大学院生は、その多くが歴史学を専攻し、編纂の主たる原動力となった。

1995年度から『資料編第1巻』以下、125年史シリーズの刊行が始まる予定だったけれども、冒頭から躓いてしまう。原稿の回収が遅延し、さらに表記の統一や掲載許可手続き、校訂、校正などにも手間取って、第1巻（旧制編）の刊行が1996年7月にまでずれ込んだのである。1994年度までの編纂準備が主として同巻に注がれたため、2巻（1996年度刊行予定）以降の準備作業はいきおい難航した。1999年度までに編纂プロジェクトを完結させることが至上命令だったこともあり、従来の刊行計画は見直しを迫られた。

1996年7月、編纂委員会は作業の進捗状況に鑑み、通史編の刊行見送りを決定する（同時に2巻以降の刊行年度も変更）。資料編を1巻増やし全3巻とするなど立教史のヒストリオグラフィーを優先させることとしたのである。かかる方針転換の背景には、全体予算の制約という条件もあった。限られた時間のなかで効率的に作業を進めるため、編纂委員

会を基本方針・原則の決定機関と位置づけ、編纂室とアド・ホックに設けられた企画委員会や小委員会、ワーキング・グループが各巻の編集方針や構成、担当者の割り振りなどの立案も含め編纂実務全般を担う態勢が徐々に形成されていった。これら実務推進グループが合宿も含め会合を活発に開き、目次案の準備や資料収集、編集・校訂作業に当たったのである。

むすび

すべてが手探りだった第1巻の苦い経験を教訓にしつつ、1997年度に資料編第2巻（新制編）、98年度に資料編第3巻（学則・統計編）、そして99年度にウィリアムズ主教書簡集全2巻と図録1巻の相次ぐ刊行が実現した。ここに立教史上初めての資料集刊行の試みが結晶化したわけである。精選、吟味のうえ収録された資料は全6巻で合計2072点（2927頁）にも及んでいた。

すでに見てきたように、完成にいたる道程は決して平坦なものではなかった。とくに第1巻の刊行前後における編纂実務の中心人物の相次ぐ退職で、編纂室内は一時「路頭に迷う」様相さえ呈していたのである。顧みるに、薄氷を踏む思いでようやく辿り着いた観は否めないけれども、霧に包まれていた史実を発掘、解明する営みに充実感があったこともまた確かなのである。

2001年1月25日㈭　研究部会（見学会）

印刷博物館を見学して

東洋大学井上円了記念学術センター　豊　田　徳　子

第24回東日本部会研究部会は、2001年1月25日（木）に開催され、東京都文京区水道にある印刷博物館を見学した。

同館は、1900（明治33）年に創業した凸版印刷株式会社の100周年記念事業として、また社会・文化貢献活動の一環として設立されたものである。「コミュニケーション・メディアとしての印刷の価値や可能性を紹介し、印刷への理解と関心を深めること」を目的に、昨年の10月7日に開館したばかりである（これ以前は、埼玉県に印刷史料館があった）。

当日は、博物館学芸員の緒方宏大氏と本多真紀子氏に館内の概要説明と案内をしていただいた。なお、博物館は、高層のトッパンビルにつながる2階建て建物の1階と地階部分にあたり、スタッフはアルバイトを含めて50名とのことであった。

この研究部会の見学会で会員参加者が最も関心を持って見学するところは、実際の史料の保存・整理の場である収蔵庫である。印刷博物館の収集対象史料は、非常に幅広く、種類・形態もさまざまとのことで、まずは、印刷機器等が搬入可能な、かなりの広さを持ったエレベーターを見てから収蔵庫の中に入った。

収蔵庫内は、全体に杉材がはりめぐらされ、24時間の間接空調設備が備えられている。そして、その中には、さまざまな形態の史料に合わせた特注のケースが置かれ、収納棚には金具類をできるだけ使わないなどの工夫が施されており、その充実した施設に率直に感嘆するとともに、現在、私たちがいる現場環境について、少なからず感じるところがあった。

展示フロアは、「かんじる」「みつける」「わかる」「つくる」の4つのキーワードに基づいて、プロローグ展示、企画展示、総合展示、印刷工房の展示が行われている。展示史料の解説は、それぞれの展示ケース前にはめ込まれた画面によってなされ、来館者はそれを椅子に座りながら、じっくりと見たり聞いたりできるようになっている。そして、印刷工房では、実際に来館者が活版印刷を体験

できるなど特色ある内容となっている。

さらに、土曜・日曜は、バーチャルリアリティー技術を使った３次元映像を上映するＶＲシアターが開演されるほか、１階には、展覧会やイベントを開催する多目的ギャラリー、印刷関連の図書・雑誌の閲覧や収蔵品の検索ができるライブラリーと情報コーナー、ミュージアムショップもあり、盛りだくさんの内容を持つ博物館である。

また、歴史的に貴重な印刷機器や印刷物を収集・保存・展示するばかりでなく、モノで収集できない史料（例えば、ヴァチカン教皇庁図書館所蔵のグーテンベルク『42行聖書』）をデジタル化し、インタラクティブ（対話）性のある付加価値をつけて、博物館内で一般来館者に公開していくなど、現在、21世紀の新しい印刷博物館としてのプロジェクトを進めているという。

これまでも、そしてこれからも私たちの生活とは切っても切れない関係にある印刷の過去・現在・未来について、興味深く見学できる博物館であった。

全国大学史資料協議会 2000年度総会議事録（抄）

日　時　2000年９月20日(水)　14時30分～15時
会　場　神戸女学院　文学部棟　Ｌ-28教室
出席校　西日本部会　20大学（39名）
　　　　　　　　　　８個人会員
　　　　東日本部会　24大学（31名）
　　　　　　　　　　５個人会員
　　　　　　　　　　オブザーバー２名
開会司会　　関西大学　熊　　博毅氏
会場校挨拶　神戸女学院
　　　　　　理事長・院長　城﨑　進氏
議長の選出
　議　長　福岡大学　　後藤　正明氏
　副議長　学習院大学　桑尾光太郎氏
議　事　(1)全国大学史資料協議会
　　　　　　　　役員会報告（承認）
　　　　(2)会長校挨拶
　　　　　　新会長校　東海大学
　　　　　　　　　　　瀬水　澄夫氏
　　　　(3)2000年度部会事業計画報告
　　　　　　　　　　　　（報告事項）
　　　　(4)その他
講演会　講演者　松澤　員子氏
　　　　（平安女学院教授、前神戸女学院大学長）
演　題　「標本資料の情報整理から展示まで」
　　　　―国立民族博物館での経験から―
見　学　図書館本館
　　　　「オルチン・コレクションの展示」
　　　　神戸女学院学舎キャンパス
懇親会　ホテルサンルートソプラで開催
　　　　　　　　　　　　　出席者69名

全国大学史資料協議会 2000年度役員会議事録（抄）

日　時　2000年９月20日(水)　13時～14時
会　場　神戸女学院　文学部棟　Ｌ-28教室
出席校　西日本部会幹事校
　　　　桃山学院　立命館　関西学院
　　　　同志社　神戸女学院　関西大学
　　　　福岡大学　龍谷大学　大西　愛氏
　　　　東日本部会幹事校
　　　　東海大学　慶應義塾　神奈川大学
　　　　中央大学　東洋大学　武蔵野美術大学
　　　　日本大学　学習院大学　國學院大学
　　　　実践女子大学　明治大学　中野　実氏
議　事　(1)役員改選について
　　　　(2)2000年度の東西両部合同事業計画について
　　　　(3)2000年度総会の議長・副議長について
　　　　(4)2000年度総会・全国研究会の役割分担について
　　　　(5)その他

全国大学史資料協議会 2000年度全国研究会記録（抄）

　　　　（第22回東日本部会研究部会）
日　時　2000年９月21日(木)～９月22日(金)
場　所　９月21日　関西学院　Ｅ号館102教室
　　　　９月22日　甲南大学　図書館ＡＶホール
参加校（９月21日）
　　　　西日本部会　18大学（36名）
　　　　　　　　　　８個人会員
　　　　東日本部会　23大学（28名）
　　　　　　　　　　５個人会員
　　　　総　計　　　41大学（64名）
　　　　　　　　　　13個人会員
　　　　　　　　　　オブザーバー２名
　　　　会場校　　　関西学院（４名）
　　　（９月22日）
　　　　西日本部会　16大学（26名）
　　　　　　　　　　５個人会員
　　　　東日本部会　23大学（28名）
　　　　　　　　　　２個人会員
　　　　総　計　　　39大学（52名）
　　　　　　　　　　７個人会員
　　　　　　　　　　オブザーバー１名

［９月21日　関西学院　Ｅ号館　102教室］
会場校挨拶　山内　一郎氏（関西学院院長）
山本　栄一氏
（関西学院学院史編纂室長）
1．報　告　井上　琢智氏（関西学院学院史編纂委員、経済学部教授）
（演題）「大学のアーカイヴズ」と
「大学とアーカイヴズ」
―利用者の立場から―
2．報　告　深井　純氏
（関西学院総合教育研究所）
（演題）「デジタル画像を用いた
美術作品研究装置の開発」
3．フリートーク　寄せられた質問・意見等の紹介を中心に行った。
4．展示会　関西学院時計台（学院史編纂室）2階ホールに於いて、各種資料のデジタル化を勧めている各専門企業６社の最新機種等の展示を見る。
［９月22日　甲南大学　図書館ＡＶホール］
5．報　告　土山　敏夫氏
（甲南大学広報室次長）
（演題）「甲南大学の阪神大震災
―教務部の対応を中心に―」
報告終了後、学園資料展示室、阪神大震災記念石碑、学内キャンパスを見学した。
6．見学会　白鶴美術館、白鶴酒造資料館を見学し、全日程を終了した。
※講演、報告会の内容につきましては、本号に掲載した諸報告をご参照ください。

全国大学史資料協議会
東日本部会幹事会議事録（抄）

第31回の東日本部会幹事会は全国大学史資料協議会2000年度役員会として開催された。
第32回　2000年11月16日㈭　13時～15時
会　場　立教大学　セントポールズ会館
２階　すずかけ
出席校　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
中央大学 東海大学 武蔵野美術大学
中野　実氏
挨　拶　老川　慶喜氏（125年史編纂委員会、経済学部教授）よりご挨拶とスタッフの紹介をいただいた。
議　事　⑴2000年度の部会の部会運営について
⑵2000年度の出版事業について
⑶2001年度の総会・全国研究会について
⑷その他
第33回　2001年１月25日㈭　14時～15時
会　場　印刷博物館
出席校　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
中央大学　東海大学　東洋大学
日本大学 武蔵野美術大学 明治大学
中野　実氏　日露野好章氏
議　事　⑴2000年３月の研究部会について
⑵2000年度の出版事業について
⑶2001年度の部会運営について
⑷その他

全国大学史資料協議会
東日本部会研究会記録（抄）

第23回　2000年11月16日㈭　15時～17時
会　場　立教大学　セントポールズ会館
２階　すずかけ・芙蓉
参加校　18大学　３個人会員　35名
会場校挨拶　老川　慶喜氏（125年史編纂委員会、経済学部教授）
報　告　永井　均氏（立教学院史編纂室）
「立教学院125年史の編纂実務に携わって」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した永井　均氏の報告をご参照ください。
第24回　2001年１月25日㈭　15時～17時
会　場　印刷博物館　23階第８会議室
参加校　20大学　５個人会員　３名
見学会
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した豊田徳子氏の報告をご参照ください。

ご案内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

神奈川大学・大学資料編纂室
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
☎ 045-481-5661
中央大学・大学史編纂課
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1
☎ 0426-74-2132

会報編集担当

神奈川大学大学資料編纂室
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
☎ 045－481－5661
東海大学文書課史料編纂委員会事務室
〒151-8677　渋谷区富ヶ谷2－28－4
☎ 03－3467－2211
中野　実（東京大学史史料室）
〒113-8654　文京区本郷7－3－1
☎ 03－5841－2077